

モンゴル人作家インジャンナシの作品に見る近代思想の誕生

—内モンゴル東部における社会情勢を通して—

ハイ・セチンゴア

昭和女子大学大学院

生活機構学研究専攻

はじめに

社会、経済、歴史を変容できるのは人間であり、人間がその変容の影響を受け考えが換えられ、その変更された考えが形になると思想になる。さらに、その思想がことばという表現道具を使って広がる。その様々な分野におけることばが広い範囲に使用され、普及を得た結果、新たな社会、経済、歴史の変容をおよぼすこととなる。

本稿では、19世紀における内モンゴル東部における最も多くの作品を作成し、特にモンゴル文学史における最初の歴史小説とモンゴル律詩の書き方を作成したモンゴル人作家であるインジャンナシの作品を主に考察する。上述のように、19世紀の中国の社会的な変容の影響が内モンゴルにも当然及んでいたことがインジャンナシを含んだ多くの作家の作品からも見られている。しかし、その中では、生活、社会、現実非常に近い文学作品である小説を書いたインジャンナシが最も注目を得ている現状である。

そのため、博士論文である「モンゴル人作家インジャンナシの作品の語彙分析 —近代語彙の視点から見た19世紀のモンゴル語—」では、19世紀の社会的な変容と歴史的な変動の影響を受け、多くの文学作品を通して自らの考えや感情を表現しつつ、モンゴル人の将来のために心血を注ぐインジャンナシの作品を検討する。インジャンナシの多くの作品の中で、最も著しい、生活と思想を表せる長編小説と歴史小説を選び、19世紀のモンゴル社会の変容を表している語彙を分析することが中心である。その結果、その様々な分野にかかわる語彙を通して新たな社会変容が起こり、新しい時代が生まれることになる。そして、本研究は、モンゴルにその新しい時代が誕生する直前の社会変容を証明するために、語彙分析を通して、その証拠を探るということである。

また、本稿では、清朝におけるモンゴル各地区、主に東部地区に対する政策について分析を行なう。特にモンゴル人の生活環境、文化、及び習慣風俗に強い影響を与えた移民政策について検討し、清王朝の滅亡までの期間における変遷プロセスを考察する。そのため、本稿は博士論文の社会背景及び思想分析の一部分に該当する。

1. インジャンナシ

インジャンナシ (Injannasi, 1837~1892年) は、幼名がハスチョロー (Qasçilaru)、漢名が宝瑛、あざなが潤亭で、清朝ジョスト盟トゥメト右旗 (現在の中国遼寧省北票市) の忠信府—シヨドルグ・バト・ホローン (siduru batu qoruxan) というモンゴル人の貴族ワンチンバル (1795~1847年) 家の七男として生まれた。

インジャンナシは文、武、芸の才能で充実した家庭で育てられたのである。インジャンナシの父親ワンチンバルはモンゴル文学史における最初の歴史小説である “köke sudur” (『フフ・ソド

ル』¹の歴史の陳述の部分の一部である第1章から第8章まで書いた人物である。その後、1840年のアヘン戦争の勃発のため、執筆を中断し、軍隊を率い、沿海防衛戦でのイギリス軍の一団との戦いで大きな功績を収めた²。インジャンナシの5番、6番の兄であるGüngnečüge（グネチユゲ）とSüngwaidanjüng（スンワイダンジュン）は寓話詩を多く作成し、活躍していた。特に、兄スンワイダンジュンに常に励まされ、『通鑑綱目』という中国語の歴史書を資料としてモンゴル語で訳し、インジャンナシの『フフ・ソドル』の執筆に貢献していた³。

インジャンナシは家庭教師や塾を通してモンゴル語、漢語、満洲語やチベット語などの学習をし、漢語と漢語の文献などにも非常に深い知識を身につけ、そのほかに、絵を画くなどの美術の才能にも恵まれていた。それにも止まらず、インジャンナシはモンゴルの各地に旅をし、多くの知識人に訪ねあい、また、北京や錦州などの大都会にも居住したりして、当時のモンゴルと中国の、さらに世界の状況がある程度把握していた。⁴

1870年代、トオメト右旗に漢人の農民蜂起が起き、インジャンナシの家族が開発したジャラン炭鉱が元手をなくしたため、生活状況が悪化し、『フフ・ソドル』の序文の彼のいうどおりだと「30歳以降、景気が悪化し、妻子が死に、すべての物事がうまくいかない」になった。そのような非常時期であるため、母親と残りの家族のために彼は考えを変えたのである。それは「このような暇な生活は大量の時間と金銭を無駄にする。さらに、金を賭けたり、アヘンを吸ったり、コオロギを戦わしたり、淫楽したりした様々な下品な享楽が広まったこの時期、自己管理をしっかりとしなければ、その享楽に陥り、人生は終わる。その時、後悔しても手遅れることになるため、紙に向かい合い、著作の享楽に陥ろう」ということであった。当時、インジャンナシが書いた作品は常に手書き写本で多くの人々に伝わっていた。

1891年、10万以上のモンゴル人を虐殺した漢人による金丹道暴乱が起きたため、多くのモンゴル人が故郷を離れ、逃亡したのである⁵。当時、インジャンナシも非難的に錦州へ移住した。その翌年、1892年、錦州に亡くなった。

上述のような19世紀半ばごろの社会的な変容により生まれた作家であるインジャンナシを本研究の対象とし、当時の彼の考えや感情の変容を観察する。

次いで、インジャンナシの考えや感情の変容が生まれた環境である当時の内モンゴル東部地区における社会的変容を検討する。つまり、それは、主に、清朝における対蒙政策、及び移民政策との関わりである。

2. 清朝の対蒙政策の概要

19世紀末から20世紀初頭にかけて、モンゴルの政治、経済などの様々な社会的な面では大きな変化が起きた。それが、清朝の政策、つまり、モンゴルに対する政策の変容に基づいたもので

¹ Injannasi “Köke sudur”、全称“Yeke yuwan ulus-un mandu᠋ᠰan törü-yin köke sudur”、中国語訳『大元盛世青史演義』、略して『青史演義』

² Injannasi-yi sudulqu qural nayiravulba “Injannasi-yin tu᠋ᠭai sudulul᠋ᠶan-u ö᠋ᠭüel-ün tegübüri” öbür mong᠋ᠶul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1982 on. p.1~6

³ 同上書（注2）

⁴ 同上書（注2）、また、Injannasi “Köke sudur”, öbür mong᠋ᠶul-un sinjilekü u᠋ᠭavan tēgnig merge᠋ᠵil-ün keblel-ün qoriy-a, 2004、王国鈞 著、瑪希 徐世明 校注、《蒙古紀聞》、内蒙古人民出版社、2006年、p.83~91

⁵ 王国鈞 著、瑪希 徐世明 校注、《蒙古紀聞》、内蒙古人民出版社、2006年、p.3~44

あると考えられる。清朝の対蒙政策により、モンゴル地区における日々膨大する漢人勢力の影響を受け、清朝の統治者である満洲人の強勢的な軍事同盟者であったモンゴル人の位置が次第に変化し、または低下された。そのため、本稿では、満洲人が政権を立て、清朝の統一局面を成立し、さらに、300年の政権を持ち続けた期間中にモンゴル、特に本稿における対象地区である内モンゴル東部に実施した政策について検討する。まず、清朝における対蒙政策について概略的に述べる。次いで、モンゴル人の生活や文化に最も影響を与えた移民政策について主に検討を行なう。

1616年以降、ノルハチがほぼ全女真部族を統一し、ハンの位につき、明朝から独立を宣言し、政権を立てた。その後、モンゴル、チベットとウイグルなどの周辺の辺境に「因俗而治」（風俗により統治する）⁶と「分而治之」（勢力を分散して統治する）⁷という多元的な支配体制政策を実施した。

それが、「内地」に対する政策とは完全に異なっていた。「内地」とは清朝の行政単位であり、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省、湖北省、湖南省、四川省、福建省、広東省、広西省、雲南省、貴州省、河北省、河南省、山東省、山西省、陝西省、甘粛省などの漢人が主に分布する18省をさす。

「因俗而治」とは、「修其教不宜其俗，齊其政不宜其宜」という策であり、モンゴル、チベット、ウイグルの地帯を対象に、上層階級が元の政治的地位を維持し、世襲する特権を持つこと。また、財政的には「内地」で行なわれていた完全税務式（庶民が国の財政収入を税金の形で完全に担う政策）とは異なり、清朝政府から大量の財政補助を実施し、王侯たちの俸給や各種の恩賞、及び救済などにおける固定的、または非固定的な支出を出していた。それに対し、軍事的には、特にモンゴルでの軍事的な要求が非常に高く、清朝政府における予備軍隊を提供し、緊急事態に用いる装備を完全に自ら用意する義務があった⁸。

「分而治之」（分離して統治する）とは「衆建而分其力」であり、辺境民族の上層階級での権力を分散することである。具体的には、元の部族であったエスニック集団を *qusuru*（ホシヨー、旗）、*čivulγan*（チョールガン）などの数多くの行政単位に分け、支配することである。

また、元の滅亡と共に各モンゴル部族が各自に政権を立て、互いに対立し、長期間を渡って戦い続けていた。清朝の康熙帝（1662~1723年）、雍正帝（1723~1736年）と乾隆帝（1736~1796年）の時、モンゴルの各部族の間での対立を充実に利用し、彼らを清朝の統治下に入れ、最後に清朝の大統一に至った。

しかし、清朝の統一によって、モンゴル人と漢人の長期的な対立が中止された。そのことは、万里の長城の南北両側の人口の流動に変化を与えた。清朝は、内モンゴル東部の各旗を卓索图（*jusutu*、ジョソト）、昭烏達（*juutu*、ジョオド）と哲里木（*jirim*、ジリム）の3つの盟に統合した⁹。ジョソト盟には喀喇沁（ハラチン）左、中、右旗と土默特（トオメト）左、右旗などの5つの旗が管轄されている。そのうち、ハラチン地帯は内地より最も近いところである。

インジャンナシの時代は、アヘン戦争（1840~1842年）から1894年の「日清戦争」までの50年間である。その間、清朝における対蒙政策に大きな変化が起きた。それが、移民政策により表現されている。次いで、文献資料、及び先行研究を参照したうえで、清朝の対蒙政策における移

⁶ 《藩部要略》序

⁷ 《嘯亭杂录》、卷3、《西域用兵始末》

⁸ 《藩部要略》序

⁹ 珠颯 《18-20世紀初 東部内蒙古农耕村落化研究》、内蒙古人民出版社、2009年、p.1

民政策について述べる。

3. 清朝の移民政策

内モンゴル東部地区は広い平原であり、そこに川や湖が分散している。そのことにより、大地が肥沃になり、内地の農民にとって大いに感心を持つこととなった。このことが、移民の増加を招くことになり、内モンゴル東部の社会変容を生じさせる主な要因となった。さらに、農耕、及び農村は清朝の内モンゴル東部地区にとって新しい生活形態であった。それらの形成や発展が内モンゴル東部の社会生活には多くの問題を生じながら、300年近くの時期を経過した。この期間が、現在の農業文化が特徴となっている内モンゴル東部社会の形成のプロセスである。

前述のように、清朝の全国を統一したことは、モンゴル人と漢人の長期的な対立が中止され、万里の長城の南北両側の人口の流動が見られるようになった。康熙帝（1662~1723年）、雍正帝（1723~1736年）と乾隆帝（1736~1796年）の時、社会的背景が長期安定であったため、内地の人口が非常に激しく増加し、人口と土地の矛盾がさらに深まった。そのため、人口が稀少である広いモンゴル平原が漢人にとってあこがれの土地になり、大規模の移民の流れが形成された。

珠飒（2009）は、清朝の時代、清朝の政策における内モンゴル東部地区に移民としたの漢人の流れを3段階に分析している。それが、清朝初期から乾隆13年（1748年）、乾隆13年（1748年）から光緒帝28年（1902年）と光緒帝28年から清朝滅亡するまでという3つの時期である。それは、清朝における移民政策の制限制度における実施状況による期間的な区分であると考えられる。

ここでは、モンゴル地区に実施していた清朝の移民政策について珠飒（2009）の3段階を基準にし、分析を行なう。

第1段階、清朝初期から乾隆13年（1748年）までの期間中は、清朝におけるモンゴルに対する支配が非常に厳しい時期であり、内地の漢人のモンゴル人居住地区への流入は厳禁されていた。しかも、その厳禁政策が実施していても、漢人のモンゴル人居住地区への流入を完全に止めることはできなかった。最初、漢人は主に3つの方法でモンゴル人居住地区へ侵入していた。第1は、満州貴族が土地を分割する際に、土地を奪われた漢人である。第2は、モンゴル王侯貴族が内地から略奪した漢人やモンゴル人が自らの開墾を導くことによって流入した漢人である。第3は、満州の皇女が嫁入りの時、付き添ってきた漢人である。また、康熙帝（1662~1723年）以降の時期では、モンゴル人居住地区へ開墾するために流れ込む漢人に対して黙認しながら、制限をも行うことである「黙認と制限」の2つの面で矛盾しながら実行されていた政策をとった¹⁰。そのうち、漢人がモンゴル人居住地区に定住したり、モンゴル人の女性と結婚したりすることを厳禁したりしていたが、内地の自然災害に襲われた大量の難民を安置するための「借地養民」令（土地を借りて、内地漢人を安置する、1723年公布）も実施されていた。

この時期における政策をとおして、トオメト両旗と隣接しているハラチンの3つの旗がモンゴル地区において開墾を行なった最初の地帯となった¹¹。当時、ハラチン、トオメトなどのモンゴル人居住地区には主に山東省、河南省などの漢人が大勢に流れ込んでいた。現在のハラチン3旗、

¹⁰ 《清圣祖实录》卷一九一、康熙三十七年十二月丁巳
[光緒]《大清会典事例》卷九七八、《理藩院・户丁》

¹¹ 同上書

トオメト2旗などの地区での漢人の由来である¹²。

第2段階、1740年代以降、20世紀初期までの時期では、内モンゴル東部地区での移民が拡大した時期である。康熙帝の時代に行われていた人数上の制限政策の実施率が非常に低かったため、乾隆帝13年（1748年）に廃棄された。その結果、モンゴル地区への漢人の侵入がさらに急速に増加し、多くの社会問題が発生することになった。清朝朝廷は慎重に考慮した上で、同年、1748年、厳格的な禁墾（開墾を禁じる）政策¹³を実施することになった。「禁墾」政策を実施した主な原因とはモンゴル人の生活習慣と関わったものである。漢人の侵入により、モンゴル人の遊牧できる草原の範囲が非常に狭くなり、モンゴル人が自らの生活習慣、風俗を失う恐れがあるからという考慮であった。しかし、厳しい禁墾政策を実施したが、内地での人口と土地の問題を解決できなく、さらに、厳しい自然災害に襲われたため、清朝朝廷が災害地の漢人のモンゴル地区への移住を奨励し、家族の同行をも許可するようになった。

康熙帝の時代から、インジャンナシの出身地であるトオメト右旗に内地の漢人が侵入することになった。その内、少数の漢人はモンゴル人の王侯の嫁になる皇女と共に移住してきた役人である。しかし、ほかの多数の漢人は高い利益を獲得できることを目指した山西省の商人と山東省の農民である。漢人の何世代の開墾を経て、トオメト地区の北の一部の土地以外の土地はすでに開墾されてしまった。そのため、トオメト右旗に居住する漢人の数が多すぎたことで、当旗の王侯が理藩院¹⁴に漢人を追放するように申請したことがあった¹⁵。1748年、トオメト右旗での漢人により開墾された土地が1643頃30畝（約10955.39ヘクタール）¹⁶である¹⁷。1760年代、トオメト右旗での漢人による開墾地が8913頃61畝9分になり¹⁸、約5倍ごろの増加となった。

嘉慶帝（1796~1821年）と道光帝（1821~1851年）の時代でも、乾隆帝の時代に実施していた「禁墾」政策を継続していた。具体的には、開墾を厳しく禁じ、開墾したものを追放せず、新たに開墾するものを受け入れないということであった。しかし、モンゴル地区への漢人の侵入の増加と共に開墾地も増加し続いた。

第3段階は20世紀初期から清朝が滅亡するまでの時期を指すが、まず当時の中国全体的な社会変容と歴史変動に注目しなければならない。1840年、アヘン戦争以降、清朝朝廷の度々の敗戦で、不平等条約に調印され、外国の列強に高額な借金を返さなければならないという非常に緊急の事態に直面した。そのため、清朝朝廷は緊急事態を緩和するために、財源を拡大し、収入を増やして、辺境防備を強化するしかないと考慮した。

さらに、義和団の乱が勃発、八か国連合軍の侵略、ロシアの東北地区への大規模な侵略などの事件を経て、300年の統治を果たした清朝の政権が崩壊のせとぎわに至った。このような事態で、1901年清朝朝廷が「新政」を実施し始めた。その「新政」では、モンゴル地区における全体的な土地を払い下げる（丈放）ことであり、その目的が「移民実辺」（移民を持って辺境を充実させ

¹² 《凌源县志》卷三“纪略”； 《清世宗实录》卷八、雍正元年六月辛酉

¹³ [光緒]《大清会典事例》卷九七八、《理藩院・戸丁》； [光緒]《大清会典事例》卷九七九、“理藩院・耕牧”

¹⁴ 清朝の中央官庁の一つ。モンゴル・チベット・青海・新疆などの藩部に関する行政事務を管理した。ロシアとの外交事務もここで行われた。（大辞泉による）

¹⁵ 一档朱批：《雅德博卿額奏哲里木垦荒事折》、乾隆三十七年四月初五日

¹⁶ （地積単位）1頃=6.6667ヘクタール、1畝=15分の1ヘクタール

¹⁷ [光緒]《大清会典事例》卷九七九、“理藩院・耕牧”

¹⁸ 喀喇沁右旗蒙古文档案文书、《乾隆二十三年给理藩院呈文档》、全宗号505、目录号1、卷宗号43

る)ではなく、「移民実辺」の名を借りて、財源を開発し、多くの利益を得ることであった。

清朝の「新政」の実施が、元々保守的であったモンゴル地区の状況を変化させ、土地が広く、人口が少ないモンゴルの社会環境に変化を与えた。戦争、自然災害、及び債務などの様々な事情から逃げ出すための漢人が内モンゴル地区に大量に入り込んだ。

しかし、移民によるモンゴル地区での開墾の発展の深まりで、モンゴル地区における政治、経済、文化などの領域での変容が非常に明らかであった。その変化は、主に農耕経済の内モンゴル地区での浸透、及び進展により表された。そのため、牧畜業は南から北へ、東から西へ収縮するようになり、農業が逆に広い範囲へ推進するようになった。

上述のように、200年以上の時間をかけて実施された移民活動を経て、内モンゴル東部地区における大部分の地帯が遊牧から農耕へ転換され、モンゴル人と漢人の雑居環境が形成された。共に、新しい矛盾、及び対立の始まりに向かったともいえる。

4. インジャンナシによるモンゴル人意識及び思想

前述のような様々な家庭背景と社会背景による当時のインジャンナシの考えと感情が時期によりどのように変化をしていたのかをここで検討する。まず、インジャンナシが作成した作品について分析する。

本稿では、インジャンナシの著作の特徴に基づいて、彼の作品を前期と後期の作品と2つに分ける。

前期の作品として『オラーン・ウールニー・ノルモス』(“Ularan egülen-ü nilbusu”、中国語訳『紅雲涙』)、連作である『ニゲン・ダブホル・アサル』(“Nigen dabqur asar”、中国語訳『一層楼』)と『オラーナ・オヒラフ・タンヒム』(“Ularan-a ukilaqu tangkim”、中国語訳『泣紅亭』)などの小説を考察すると以下の特徴が見られる。まずは、中国語からの音訳語彙が多様であり、中国語からの意識語彙も少なからず用いられている。すなわち、中国語の影響が強かったということである。また、これらの作品は、1848~1865年の間、インジャンナシを20歳ごろに作成されたと推定されている¹⁹。そのため、当時の、インジャンナシが活動していた地区における社会的状況が比較的安定し、モンゴル人と漢人との民族問題が激しくなかったことが考察される。

しかし、1862~1877年、漢人と回族の間での矛盾により発生した回族の反乱、イケ・ジョー盟を始め、内モンゴル東部のトオメト左・右旗などの地帯を含み、反清朝、反王侯の「ドゴイラン運動」、モンゴル人に最も打撃を与えた1891年の金丹道の暴乱などでモンゴルの社会情勢が非常に不安定になった。そのため、清朝の強い軍事予備であったモンゴルが自らの救済、及び守りの道を探り始める。

そのうち、文学作品を通して、下品な享楽している、または、宗教や封建社会制度に洗脳されている様々なモンゴル人のモンゴル人としてのアイデンティティを呼び起こそうとしていた作家たちが現れた。その中でインジャンナシの考えが最も先進的であり、文学作品の作成上にも独特であり、小説であり、律詩でありのモンゴル文学史における新しい一歩を踏み出した。

インジャンナシの後期の作品の中で最も著しいモンゴル文学史における最初の歴史小説であ

¹⁹ Üyuwai “monggul ündüsüten-ü oyir-a üy-e-yin udqa jokiyal-un tuqai ögülekü ni” öbür monggul-un arad-un keblel-ün qoriy-a , 1999 on.

る『フフ・ソドル』の特徴を見よう。1870年代から1892年まで、インジャンナシが『フフ・ソドル』の第9章以降を執筆し、120章まで執筆したと伝えられているが、現在に至り、69章まで文章が発見され、出版されている。

『フフ・ソドル』を作成する際に、前述のような社会的な要素が入っているため、『フフ・ソドル』の語彙に中国語の影響が非常に少なかった。さらに、“terigün anggi”（初文）から“naimadurar anggi”（第8文）までの序説では、インジャンナシが自らの生活環境における様々なモンゴル人の生き方や価値観について風刺的な表現で論じていた。そのような表現で当時のモンゴル人に刺激を与え、モンゴル人としてのアイデンティティを呼び起こそうとしていたインジャンナシの思い、または、モンゴル人としての誇りを持っているインジャンナシのプライドが考察されている。

終わりに

19世紀半ば以降、つまり、1870年代前後、モンゴル人の中でのモンゴル意識、すなわちアイデンティティが強く表れている特徴が目立つ。その表現として、インジャンナシを始め、モンゴル文学作品におけるモンゴル語語彙の扱い方の変化、意志、または思想を通して「近代」への傾向が見られている。

参考文献

日本語 (著者名の 50 音順)

- 今堀誠二 『中国封建社会の構成——その歴史と革命前夜の現実』、頸草書房、1991 年
- 川島真 『近代国家への模索 1894-1925』 (シリーズ中国近現代史②) 、岩波新書、2010 年
- 『近代東アジアの諸相』、「鹿児島経済大学地域総合研究所」編、勁草書房、1995 年
- 楠木賢道 『清初対モンゴル政策史の研究』、汲古書院、2009 年
- 高橋雄治、渡辺裕 『清国内蒙古喀喇沁王部鉞業調査報文』 <http://kindai.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/802729/2> (この図書は著作権法第 67 条による文化庁長官裁定を受けて公開されている)、1906 年
- ハイシツヒ著 田中克彦訳 『モンゴルの歴史と文化』、岩波文庫、2000 年
- フフバートル「漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成 ——中国領内のモンゴル語定期刊行物発達しに沿って——」一橋大学大学院社会学研究科 博士学位論文、1997 年
- ボルジギン・ブレンサイン 『内モンゴル東部地域における農耕村落形成の一断面——ランブントブ ガチャーの事例分析から』、「早稲田大学東洋史懇話会」編、「東京：早稲田大学文学部東洋史学専修室」出版、1999 年
- 矢野仁一 『近代蒙古研究』、弘文堂書房、1940 年
- 吉澤誠一 『清朝と近代世界 19 世紀』(シリーズ中国近現代史①)、岩波新書、2010 年
- ワシーリー・モロジャコフ、木村汎訳 『後藤新平と日露関係史——ロシア側新資料に基づく新見解』、藤原書店、2009 年

モンゴル語 (著者名の abc 順)

- A.Ünenbatu “ mongrul sudulul-un ögülel material-un kelkiyasü ” öbür mongrul-un survan kumüjil-ün keblel-ün qoriy-a , 2006 on.
- Bürinmendü “ Injannasi-yin gün uqavan neigem-ün üjel sanav-a-yin sodulul ” öbür mongrul-un arad-un keblel-ün qoriy-a , 1997 on.
- Bürinmendü “ Injannasi-yin soyul irgensil-ün üjel sanavan-u sudulul ” liyuuning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a , 2009 on.
- Ča.Čoyidandar、Jimba “ mongrul ulus-un orčin üy-e-yin uran jokiyal ” öbür mongrul-un yeke survaruli-yin keblel-ün qoriy-a, 2007 on.
- Injannasi “Köke sudur”, öbür mongrul-un sinjilekü uqavan tēgnig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a, 2004 on.
- Injannasi-yi sudulqu qural nayiraxulba “ Injannasi-yin tuqai sudululran-u ögülel-ün tegübüri ” öbür mongrul-un arad-un keblel-ün qoriy-a , 1982 on.
- Jo.Temürčereng “ mongrul kelen-ü üge-yin sang-un sudulul ” öbür mongrul-un survan kumüjil-ün keblel-ün qoriy-a , 2004 on.
- Küčün “ Injannasi kiged jusutu-yin soyul ” öbür mongrul-un survan kumüjil-ün keblel-ün qoriy-a , 1998 on.

N.Sayisiyaltu “ mongxul uran jokiyal-un teuke ” (ert oyir-a üy-e) , liyouning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a , 2004 on.

Na.Altanša “ öb soyul-un örlüg darqad ” öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy-a , 1997 on.

Namsarai “ Injannasi-yin jokiyal deki tusalaqu üile üge-yi sinjilekü ” “ öbür mongxul-un yeke surxaruli-yin sedgü l ” jirvuduxar quruçar-a , 2008 on.

Yondun “ öbür mongxul-un mongxul sudulul-un jarun jil-ün jarun kereg ” öbür mongxul-un surxan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a , 2004 on.

Ü.Şuxar-a ,To.Delgersang “ erten kiged orçin üy-e-yin mongxul jokiyalçid ” öbür mongxul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a , 1985 on.

Ü.Tuyar-a “ olan ulus-un mongxul-un sudulul-un toyimu ” öbür mongxul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a , 1999 on.

Üyuwai “ Injannasi ba tegün-ü jokiyal bötügel-ün tuqai sodulul ” ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a , 2002 on.

Üyuwai “ mongxul ündüsüten-ü oyir-a üy-e-yin udqa jokiyal-un tuqai ögülekü ni ” öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy-a , 1999 on.

Γalingdar-a “ Injannaşi-yin şilüg-ün onçalix ” öbür mongxul-un surxan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a , 1987 on.

中国語 (著者名の abc 順)

白拉都格其、金海、赛航 著 『蒙古民族通史』、内蒙古大学出版社、2002 年

宝玉柱 『清代蒙古族社会转型及语言教育』民族出版社、2003 年

布仁赛因 《近现代蒙古人农耕村落社会的形成》、内蒙古大学出版社、2007 年

曹道巴特尔 《中国蒙古学文库 蒙汉历史接触与蒙古语言文化变迁》、辽宁民族出版社、2010 年

黄健英 《北方农牧交错带变迁 对蒙古族经济文化类型的影响》、中央民族大学出版社、2009 年

金海 《从传统到现代——近代内蒙古地区文化史研究》、内蒙古人民出版社、2009 年

李侃、李时岳、李德征、杨策、龚书铎 《中国近代史 1840-1919》、中华书局、1994 年

孟和宝音 《中国蒙古学文库 近代内蒙古行政建制变迁研究》、辽宁民族出版社、2010 年

《内蒙古近现代王公录》、内蒙古文史资料 第 35 辑、「中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会文史资料委员会」编、1989 年

苏德毕力格 《晚清政府对新疆蒙古和西藏政策研究》、内蒙古人民出版社 2005 年

忒莫勒 《内蒙古旧报刊考录 1905-1949.9》内蒙古出版集团 远方出版社、2010 年

王国鈞 『蒙古紀聞』、約 1846 年ごろに完成、瑪希、徐世民の校注により内蒙古人民出版社出版、2006 年

王玉海 《发展与变革——清代东部由牧向农的转型》、内蒙古大学出版社、2000 年

乌力吉陶格套 《清至民国时期蒙古法制研究——以中央政府对蒙古的立法及其演变为线索》、内蒙古大学出版社、2007 年

乌云毕力格、白拉都格其 《蒙古史纲要》、内蒙古人民出版社、2006年

阎光亮 《清代内蒙古东三盟史》、中国社会科学出版社、2006年

珠飒 《18-20世纪初 东部内蒙古农耕村落化研究》、内蒙古人民出版社、2009年